



# ホームレスとして生きること～Nさんの半生

日本ほどではないが、ドイツにもホームレスはいる。日本よりずっと生活保護をもらいやすいはずなのに、街でホームレスを見かけるのはなぜだろうと思っていたが、元ホームレスの女性の話を書く機会があり、ホームレスとして生きるとは差別され、社会から阻害されることであると実感した。

現在は50代になった元ホームレスNさんの半生を綴りたい。

私は田舎の町に住んでいて、7歳の時から近所の人の車を洗って300円ほどもらっていた。ある日近所のおじさんから「アイスクリームを買ってあげる」と言われ、車に乗った。アイスクリームを食べた帰りの車でそれは起こった。「大人は正しいのだから言うことをききなさい」と教わって育ったため、親に話しても信じてもらえないだろう。だから強姦されたことを黙っていた。

女性の担任が、男性の先生が近づくとおびえるなど私の様子がおかしいことに気づて何度も両親に話をしたが、両親は真に受けなかった。

何度か家出を繰り返し、見つかって親元に戻されることもあったが、州を超えたフランクフルトで同じような境遇の人たちの仲間に入れてもらった。路上生活でも学校には通っていたから、役所は黙認していた。15歳10ヶ月になった時、ハノーファーに向かう列車の中で警察に見つかって親元に連れ戻され、役所の青少年課がきた。

役所の人が親に「もう大きいんだから、閉じ込めておくことはできませんよ、自由を認めてあげなさい」と言うと、親は「それなら好きにすればいい」とさじを投げた。

役所の人は私をハノーファーに連れて行ったが夜遅く、未成年が宿泊できる場所がない。昼間だったら似たような人を自分で見つけ、仲間に入れてもらったのに。結局、売春や麻薬をしている女性たちの施設に放り込まれた。それが運命の分かれ道だった。「お金を稼げば、好きなことができるよ」と言われ、自分も同じことをするのに時間はかからなかった。

客引きをしていい場所は決まっている。そこに立っていると、売春婦同志いつものまにか顔見知りになる。それが、弱いけれど互いのセーフティーネットにもなる。

市内にマクドナルドができたばかりのころ、客がチーズバーガーとコーラを持ってきた。車の中で食べ、目が覚めたら地下室に閉じ込められていた。3ヶ月監禁された。なんとか自力で逃げたが。

この社会には化け物が混じっている。普通の市民に見えるが、実は地下に人間を隠している。誰も気づかない。自分は戻れたけれど、戻れない人はたくさんいる。仲間はどこに行ったのか心配してくれたが、警察に捜索願を出すわけではない。誰も探さないし、いなくなったまま気付かれない。

春を売る人は、人権がない扱いをされる。暴力や窃盗にあって警察に被害届を出しにいつても、自業自得だろうという

顔をされるから二重に屈辱的だ。麻薬を手放せない人も多い。

売春をするゲイはもっとひどい扱いだ。女性は無料で市の健康検査を受けられるが、ゲイにはない。路上に立つ男性は男性を客としており、女性向けではない。つまり女性を買うのも男性を買うのも男。男の性が売春を支えている。

ハノーファー市内には現在、家出した未成年が3日間過ごせる建物がある。青少年課は介入せず、誰も何もきかない。子どもたちで料理をし、夜はボードゲームや映画鑑賞など多数決で何をするか決める。3日したら家に戻る子もいれば、役所に保護をのぞむ子もいる。そういう場所があるのはいい。昔はなかった。

Nさんは、20年以上前に売春や麻薬から足を洗った。だからこうして話すことができる。その当時自分が何を必要としていたか、伝えることができる。それをきいて、私たちは立ち止まって考えることができる。

彼女が別の環境に生まれていたら、親の理解があれば、別の時代に生まれていたら、今のようになっていたらだろうか。そう思えば、自分だってそのような状況になっていたかもしれない。

差別の心は社会全体に蔓延していて、異端児をつまはじきにしていることに通常、私たちは気づかない。ホームレスであることはそれを四六時中意識させられることであり、社会のもっともきつところにいることなのだと感じた。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

## AKIRA

### 成長記録

年末年始、フランスでお世話になったホストファミリーと初めて対面。両親と4、6、13歳の男の子、そして11歳の犬が電気自動車で13時間かけてグルノーブルからやってきました。ドキドキでしたが、とても親しみやすい家族ですぐ打ち解け、明もずっとここに。4泊5日でしたが、動物園や博物館に出かけ、うちで手巻きすしや年越しそばを食べ、ハノーファーを堪能しました。

大晦日の夜は外にでて、人々が打ち上げ花火を盛大にやっているのを見ました。フランスでは花火は禁止なので珍

しかったみたい。さまざまなチーズをおみやげにもってきてくれ、夕食後にこんなに大きく切って食べるんだとびっくり。けど慣れるとなかなかおいしいものです。

みなホテル住まいでしたが、13歳の子だけ明の部屋に泊まり、最後の晩は「ずっと起きてる」といって2人で朝6時までゲームやおしゃべりしてました。日本語を勉強していて、いつか日本に来たいといっています。お母さんは17歳のときイタリアでベビーシッターを1年した経験から、海外に出る若い人を応援しているそうです。今度はフランスに遊びに行くねーといってお別れしました。明は今学期のフランス語のテストはほぼ満点で、クラスで一番でした。